肥筑方言に見られる心情訴え文について

住　田　幾　子

はじめに

九州方言の一特色をなす、いわゆる「カ」語尾形容語は、今日、肥筑方言に盛んなものである。この形容語の「カ」語尾化は、いまなお、薩隅方言域に進展してもいる。九州方言を代表するものの幾つかは、「カ」語尾形容語と同様の存立、進展のさまを見せている。それらは、主として、九州西部方言域に存立するものであると言えよう。

「カ」語尾形容語の本性を討究することは、九州西部方言の本質を解明する手がかりになると考えている。これについては、神部宏泰氏に「体言性」（「九州西部方言の形容語――カ語尾形容詞を中心に――」（『国語教育研究 第26号』 昭和55年）とのご指摘がある。接尾辞「サ」と同様に、「カ」もまた、「接尾辞的な性格」を有していようと述べていられる。

文表現を、体言に相当するものとする傾向は、形容語が述部に立つ、心情を訴える文において顕著に認められる。肥筑方言においては、

1　形容詞語幹の名詞文
2　「形容語語幹＋接尾辞サ」の名詞文
3　「カ」語尾形容語文

の三者が、心情訴え文として生きている。人々の心情に応じた、感声的・詠嘆的・感動的な文表現を聞くことができる。以下には、現時点において得ている肥筑方言域での用例をかかげながら、心情訴え文の表現法を把握し、「カ」語尾形容語文が、名詞文に相当する働きを示すさまを見ていくことにする。

一　形容詞の語幹が述部に立つもの

形容詞の語幹が述部に立つ文表現を、筑前の最北端に位置する福岡県北九州市若松区域の方言生活に例をとってみよう。

まず、感声的な文表現として、

◦イタッ。　痛い！　（中女）
◦アツッ。　熱い！　（中男）
◦クサッ。　臭い！　（老女）

などが聞かれる。身体に危険を感じたり、異常を感じたりした時、瞬時に発せられるもの

である。文の末尾にそえられた促音に緊迫した状況が感じとられる。形容詞の語幹が述部に立ち、一語で文を成す感声的な名詞文である。

つぎに、形容詞の語幹一語による名詞文でも、文末を長呼する文表現がある。

◦イター。　痛いなあ。　(中女)
◦アツー。　暑いなあ。　(老女)
◦クサー。　臭いなあ。　(中女)

などと、文の末部を長呼して、一種の詠嘆的な心情を訴えている。先の感声的な表現とは趣きを異にする。この他にも、

◦サブー。　寒いなあ。　(中男)
◦ツメター。　冷たいなあ。　(青女)
◦ニガー。　苦いなあ。　(中女)
◦キツー。　だるいなあ。　(中女)
◦スゴー。　すごいなあ。　(青女)
◦ネムター。　眠いなあ。　(中女)

などの用例がある。文末の長呼が二拍に引きのばされ、

◦イターア。　痛いなあ。　(中女)
◦クサーア。　臭いなあ。　(中女)

などとなると、感動文ともなってくる。文末の長呼もまた、文表現に微妙な意味あいをそえている。

促音の役割も見のがせない。

◦イッター。　痛いなあ。　(中女)
◦クッサー。　臭いなあ。　(中男)

となると、程度のはなはだしい状態であることを感じさせる。

また、感声的な第一文に、詠嘆的な第二文が加えられた連文表現の、

◦イタッ。イッター。　痛い！痛いなあ。　(中女)
◦クサッ。クッサー。ハナガ　モゲル。
　　臭い！臭いなあ。鼻がもげそうだ。　(中女)

なども聞く。

さて、感動話部をともなった。

◦ワー　ニガ。　わあ、苦いこと。　(中女)
◦オー　サブ。　おお、寒いこと。　(老女)
◦アー　キツ。　ああ、だるいこと。　(老女)
◦ウワー　スゴ。　うわあ、すごいこと。　(中女)
◦ワッ　メズラシ。　わっ、珍しいこと。　(中女)

などの表現も、日常生活においてよく聞かれる。これらは、全体に低い調子で、ひとりがたりにも発せられる。文末を長呼すると、

◦キャッ　キチャナー。　きゃっ、汚ないなあ。　（中女）

と、感動的な表現となる。

文末詞「ヤ」をそえた表現、

◦オットロシ　ヤ。マー。　なんとまあ。　（老女）

◦マダ　タベヨ　ン。オットロシヤ。マー。

まだ食べているの。なんとまあ。〈ひどく時間のかかること。〉　（老女）

もある。「なんとまあ。」という意味あいのもので、驚嘆した時に、ややおどけて使う慣用的な表現である。

肥前の佐賀県鹿島市域では、

◦ヤグラシ。　うるさい！　（老男）

◦クドラシ。　くどい！　（老男）

などの一語文が聞かれる。不快の極に達して叱りつけるものである。この他にも、

◦バカラシ。　ばからしい。　（中女）

◦オトロシ。　恐ろしい。　（中女）

◦メズラシ。　珍しい。　（中女）

などの用例があるが、この種の表現は、四音節の形容詞の語幹で、「シク活用」のものに限って見られる。これらの語の第三音節を長呼する、

◦ヤグラーシ。　うるさいぞ。（老　）

◦クドラーシ。　くどいよ。　（老女）

◦ヨソバーシ。ハヨ　ステンシャイ。　汚ないな。早く捨てなさい。　（老女）

などの文表現も聞く。当地方言では、第三音節の長呼が慣用的におこなわれ、一つの表現法を成している。感動話部のともなった、

◦アー　ヤグラシ。　ああ、わずらわしい。　（中女）

なども聞かれ、表現上の、微妙な意味あいの差異を感じる。

以上が、形容詞語幹による心情訴え文表現の諸相である。

二　形容語の語幹に接尾辞「サ」が付いて述部に立つもの

形容語の語幹に接尾辞の「サ」が付いて述部に立つ、いわゆる「サ詠嘆法」と呼ばれる表現法について見ていく。

鹿島市域での用例をかかげてみたい。まず、

◦コノ　ガラノ　ヨサー。　この柄のいいことねえ。　（青女）

◦キレーカテバッカイ　ユーテ　オセージノ　ウマサー。　奇麗だとばかり言ってお世辞のうまいことねえ。　（青女）

◦モー　クミーコチャンノ　オンナラシサー。　もう、久美子ちゃんの女らしいことねえ。　（老女）

◦コン　ヒトノ　ケチサー。ナーモ　クンシャレン。　この人のけちだことねえ。なに

もくださらない。　（青女）

◦コイノ　キレーサー。　これの奇麗だことねえ。　（青女）

など、主部の格助詞「ノ」と述部の接尾辞「サ」とが呼応した表現が見られる。また、

◦モーコチャンノ　テワ　シローシテ　ウツクシサ。　素子ちゃんの手は白くて美しいこと。（老女）

◦ソギャン　ヨンニュ　イルッケン　スッパサー。　そんなにたくさん入れるから酸っぱいことねえ。　（青女）

◦リサチャンダチバ　ミタサー。　梨沙ちゃんたちを見たいことねえ。（青少）

◦アン　ヒタ　キョーサー。　あの人は器用だことねえ。　（青女）

などの用例もある。

「サ詠嘆法」の一語文、

◦ヨソバッサ。　汚ないこと。　（青女）

◦アツカマッサ。　厚かましいこと。　（青女）

◦ヌクサー。キョーワ　ナシ　ガン　ヌッカロー　カー。　暑いことねえ。きょうはどうしてこんなに暑いのだろうかねえ。　（青女）

◦オットロシサー。メノ　トビズッゴタ　ネダンヤッタ　バイ。　恐ろしいことねえ。目のとび出るほどの値段だったよ。　（老女）

◦ガン　ヨンニュ　ステテ。モッタイナサー。　こんなにたくさん捨てて。もったいないことねえ。　（老女）

◦ケチサー。チョット　ケチサー。　けちだことねえ。ちょっと〈びっくりするほど〉けちだことねえ。　（青女）

◦リッパサー。　立派だことねえ。　（中男）

なども、よく聞く。「サ詠嘆法」の名詞文においても、

◦ワルサ。　悪いこと。　（青女）

◦ワルサー。　悪いことねえ。　（青女）

◦ワルーサ。　悪いことったら。　（青女）

などと、三種の表現法が見られる。訴える心情に微妙な差を感じる。

感動話部をともなった表現では、

◦イタッ。アー　イタサ。　痛い！ああ、痛いこと。　（青女）

◦オー　メズラッサ。　おお、珍しいこと。　（老男）

◦オー　ツヨサー。アンター。　おお、強いことねえ。あんたは。　（青女）

などを聞いている。以上の様相をもって、当地では、「サ詠嘆法法」が、老若男女を問わず、さかんにおこなわれている。

この「サ詠嘆法」は、日本語上、特異な表現法であり、九州方言に特有のものと思われる。その、九州方言上でのおおよその分布状況は、『九州方言の基礎的研究』（九州方言学会編　風間書房　昭和44年）によって知ることができる。同書に、調査項目として「サ

詠嘆法」がとりあげられており、九州各県別の解説がなされている。その設問は、

山の非常に美しいのに感心したとき、「アン山ノウククッサー。」のように言うことがありますか。

というものである。まず、福岡県下の状況は、岡野信子氏の解説に、

筑後全域と筑前西南域に行なわれる。（頁209）

とある。佐賀県下（小野志真男氏）は、

形容詞・形容動詞の詠嘆的用法として語幹にサをそえるのは全県的である。（頁217）

という状況である。長崎県下（西島宏氏）は、

サ詠嘆法は対馬を除いて県下一般に使われる。（頁225）

とある。熊本県下（秋山正次氏）は、

サ詠嘆法は全県を通じ、老少とも旺盛である。（頁234）

となっている。鹿児島県下（上村孝二氏）では、

今回の調査ではあらわれないが（調査不足）両長島の指江地方（地点番号１）と屋久島では、アン人ノ強サ。舟ノハヤサヨのようにいうことがある。（頁243）

となっており、宮崎県下（岸本実氏）は、

北部日向に部分的に存する。恐らく肥筑方言の流入であろう。

とある。大分県下（糸井寛一氏）は、

該当事象なし。

である。これらの状況を見合わせると、「サ詠嘆法」は、肥前、肥後、筑後と筑前西南域において一般的におこなわれていることがわかる。まずは、肥筑方言のものであると言えよう。ついで、薩隅域と、肥後に隣接する日向北部域とにもその存立がうかがえる。したがって、大きくは、九州西部方言域に生きる表現法であると言える。この分布状態は、「カ」語尾形容語のそれとほぼ一致するものである。

後に述べる「カ」語尾形容語の使用状況は、九州西部方言上、隆盛、進展または衰退の途上など、地域によってさまざまの様相を示している。「サ詠嘆法」もまた、同様に種々の状況を呈しているものと考えられる。鹿島市域方言は、「サ詠嘆法」の隆盛なさまを示していよう。いっぽう、衰退現象を見せるのが、北九州市若松区域方言における「サ詠嘆法」の用法である。当地で聞かれるのは、

- ◦オッ　アタマノ　ヨサ。　おっ、頭のいいこと。　（中女）
- ◦マー　キョーノ　アツサ。　まあ、きょうの暑いこと。　（老女）
- ◦ウワーッ　コノ　ニガサ。　うわあ、この苦いこと。　（中女）
- ◦ナンート　カッコーノ　ワルサ。　なんて格好の悪いこと。　（中女）
- ◦アーア　コノ　キツサ。　ああ、このだるいこと。　（老女）
- ◦クサッ。コノ　クササ。　臭い！この臭いこと。　（老女）

などである。格助詞「ノ」と接尾辞「サ」とが呼応した表現が慣用的におこなわれるのみである。これらの文表現は、老年・中年の女性層に聞かれるものである。青年層に至って

は、「サ詠嘆法」を聞き得ない。

福岡市域方言においての「サ詠嘆法」もまた、衰退の途をたどっていよう。当地域では、「サ詠嘆法」は、主に老年層の女性に聞かれるもので、中年層・青年層においては、「サ詠嘆法」にかわって、「カ」語尾形容語による感動表現がさかんにおこなわれているのである。

三　「カ」語尾形容語が述部に立つもの

「カ」語尾形容語は、カリ活用方式をとり、未然形・未来形、連用形、終止形、連体形、已然形の、各活用形を有している。ここでは、その終止法をとりあげ、「カ」語尾形容語が述部に立つ文表現を見ていくこととする。

「カ」語尾形容語を日常一般に使用する鹿島市域方言における文表現例をとりあげてみたい。まず、「カ」語尾形容語が述部に立ち、文を終止する文表現がある。

- ザンネンカラージ　ヨカ。イツデン　デクッ。　残念に思わなくてもいい。いつでもできる。　（老女）
- オナゴワ　ヤサシカランギ　ユー　ナカ。　女子は優しくないとよくない。（中男）
- アン　ヒタ　キレーカバッテン　ココロノ　ワルカ。　あの人は奇麗だけれど心が悪い。　（青女）
- アソコン　オンセンナ　ホンニ　キモチン　ヨカラシカ。　あそこの温泉はほんとうに気持がいいらしい。　（老女）

などの例がある。また、文末詞がそえられた。

- ヨカ　タイネ。オクッテ　イクケン。　いいよ。送っていくから。　（青女）
- ミカケノ　ヨカケンゴト　シトーケン　ソギャン　ヒドー　ナカ　ヨ。　見かけがいいようだからそんなにひどくはないよ。　（老女）
- フツーゴニ　チカカ　ト。　普通語〈普段のことば〉に近いの。　（老女）

などの例もある。これらは、平叙文である。

詠嘆的な様相を帯びた用法もある。

- コリャ　クサカ。　これは臭いこと。　（青女）
- ホントトン　ウマカ。　ほんとうにうまいこと。　（老女）
- ホンニ　サケバッカイ　ノーデ　ウラメシカ。　ほんとうに酒ばかり飲んで恨めしいこと。（中女）
- マー　シズカカ。　まあ、静かだこと。　（青女）

などの用例を聞く。また、

- キモンノ　ヨカ　ネー。　着物がいいなあ。　（青女）
- アンター　コスカ　ナー。　あんたはこすいなあ。　（老女）
- コリャー　ウレシカ　ネー。　これはうれしいなあ。　（老女）
- ナマスンゴタッ　サッパイ　シタトバ　タベタカ　ネー。　鱠のようなさっぱりした

のを食べたいなあ。　（青女）

などと、感動的な用法も見られる。この種の表現では、

- サムカ　ネー。　寒いなあ。　（青女）
- フユーカ　ナー。　面倒くさいなあ。　（老女）
- アー　イタカ　ネー。ナシ　ガントバ　オイトッ　トー。　ああ、痛いなあ。どうしてこんなのを置いてるの。　（青女）
- オッソロシカ　ナター。　恐ろしいなあ。　（老女）
- アー　ヤーラシカ　マゴサン　ナター。ヤーラシカ　ヨー。　ああかわいらしい孫さんねえ。かわいらしいなあ。　（老女）
- ミゴトカ　ネー。　みごとだなあ。　（青女）
- ホンニ　ナサケナカー。キモチノ　ワカッテ　モラワレジー。ザンネンカ　ネー。　まったく情ないなあ。気持がわかってもらえないで……。残念だなあ。（青女）

など用例もあげられる。

さらに、「カ」語尾形容語が述部に立って文を終止し、文末を長呼する感動表現の用法がある。

- ワー　コリャー　ヨカー。　わあ、これはいいなあ。　（青女）
- コリャ　ウマカテ　イーナイタイドンガ　イッチョン　ウモ　ナカー。スラーゴトドンバカイ　ユーテー。　これはうまいて言われたけれどひとつもうまくないなあ。うそばかり言って……。　（老女）
- アヤーコサンナ　ハヤカー。ナンデン　パッパッパーテ　スマセンシャー。　史子さんは早いなあ。なんでもぱっぱっとすませなさる。　（老女）
- カケタゴター　ツボバ　ダイジニ　シテカラ　ヤグラシカー。　欠けたような壺を大事にして煩わしいなあ。　（青女）
- ソイヲ　ミタカー。　それを見たいなあ。　（青女）
- ワー　コン　ヒトノ　ケチカー。　わあ、この人はけちだなあ。　（青女）

などが、その例である。感動話部をともなった表現、

- アー　イタカー。　ああ、痛いなあ。　（青女）
- ワー　サムカー。　わあ、寒いなあ。　（中男）

なども聞かれる。

「カ」語尾形容語の一語文もよく聞く表現であり、

- ヨカー。　いいなあ。　（中男）
- ヌッカー。　暑いなあ。　（中男）
- ヒヤカー。　冷たいなあ。　（青女）
- ワルカー。　モー　イタズラバーカイ　スッ　コヤッケンガー。　悪いなあ。もういたずらばかりする子だから……。　（青女）
- ヤーラシカー。ムスメジョーデ　ヨカッタ　ナター。　かわいいなあ。女の子でよか

ったねえ。〈誕生を祝うあいさつことば〉　（老女）

◦キレーカー。　奇麗だなあ。　（青女）

◦リッパカー。　立派だなあ。　（中男）

などの例がある。「カ」語尾形容語文には、

◦ヨソバシカ。ハヨ　コギャンタ　ステンシャイ。　汚ないこと。早くこんなのは捨てなさい。　（老女）

◦アツカマシカ。　あつかましいこと。　（青女）

◦オットロシカ。　恐ろしいこと。　（青女）

など、文末を長呼しない用法もある。詠嘆文とも呼べるもので、「サ詠嘆法」に近い表現ともなっていよう。

以上が、鹿島市域方言における「カ」語尾形容語が述部に立つ文表現の諸相である。これらの表現は、老年層・中年層はもとより、青年層・少年層においても日常の方言生活におこなわれているものである。当地にあっては、「サ詠嘆法」と「カ」語尾形容語による感動表現法とがともに隆盛を極めている。両者の表現形式はまた、共通するところがある。

さて、所かわって、福岡市域での状況は、どうなっているのだろうか。福岡市域の方言生活においても、まずは、鹿島市域と同様の表現法の類型が認められる。

平叙文の例では、

◦ドゲン　シタラ　ヨカ。　どうしたらいい？　（青女）

◦デンシャガ　ハヤカ。　電車〈のほう〉が早い。　（青女）

◦チョット　タノンデ　ヨカ　ネ。　ちょっと頼んでいいかい？　（中男）

◦ドゲンモ　コゲンモ　ションナカ　タイ。　どうにもこうにもしかたがないさ。（青女）

◦アッチノ　ミセノ　ホーガ　ヤスカ　ヨー。　あっちの店のほうが安いよ。（中女）

などが聞かれた。

感動文には、まず、文末詞のそえられた、

◦コノ　ヨーフク　ヨカ　ネー。　この洋服はいいなあ。　（中女）

◦キョーワ　サムカ　ネー。　きょうは寒いなあ。　（老女）

◦ヨカ　ナー。　いいなあ。　（中男）

◦ハヤカ　ネー。　早いなあ。　（老女）

◦ウツクシカ　ネー。　美しいなあ。　（老女）

◦ナマイッカ　ネー。　なまいきだなあ。　（中女）

などの表現がある。「カ」語尾形容語で文を終止する表現では、

◦ワー　コレ　ヨカー。　わあ、これはいいなあ。　（青女）

◦コゲーン　サムカ　ヒワ　ガッコー　イキトー　ナカー。　こんなに寒い日は学校に行きたくないなあ。　（青男）

◦イマカラ　デテ　イクノ　シロシカー。　今から出かけていくのはうっとうしいなあ。　（中女）

◦コノ　コ　アブナカー。　この子は危ないなあ。　（中女）

などを聞いた。また、

◦スゴカ。　すごい！　（老女）

◦シェカラシカ。　うるさい！　（中男）

などの「カ」語尾形容語文の感声的な表現も聞かれる。

これまでに見た文表現は、当福岡市域では、老年層・中年層の男女間には、一様におこなわれるものである。が、20代の女性層から、ゆれが見えはじめる。10代後半の女性層から、それ以下の少年層に至っては、まったく聞かれない。ところが、文末を長呼する「カ」語尾形容語文の感動表現法のみは、小学生の男女間にあっても、なおさかんであり、

◦ヨカー。　いいなあ。　（少男）

◦サムカー。　寒いなあ。　（少女）

などが、日常一般におこなわれているのである。30代・20代・10代後半の年層においては、男女ともに、上記の文表現の他にも、

◦モッタイナカー。ナン　ショー　トー。　もったいないなあ。なにをしているの。（青女）

◦コスカー。ソラ　コスカ　ヨ。　こすいなあ。それはこすいよ。　（中女）

◦ヤサシカー。　やさしいなあ。　（青女）

◦キレーカー。　奇麗だなあ。　（青女）

◦オーチャッカー。　横着だなあ。　（青男）

などがよく聞かれる。逆に、60才以上の老年層にあっては、この種の表現法が見られない。老年層では、「ヨカ　ネー。」「シロシカ　ネー。」などと、かならず、文末詞がそえられている。感動表現の「カ」語尾形容語文は、「カ」語尾形容語の発展の頂点に立つものであると言えよう。

福岡市域での「カ」語尾形容語は、徐々に衰退し、「イ」語尾に共通語化されていくものと予想される。その中にあって、「カ」語尾形容語文は、感動表現として慣用的におこなわれ、生き続けるであろう。これは、また、「サ詠嘆法」の名詞文の存続に共通するものでもあろう。

おわりに

肥筑方言において、「カ」語尾形容語文は、「サ詠嘆法」の一語文つまりは「サ」語尾形容語文によく対応している。接尾辞「サ」をとる表現であるところから、「サ」語尾形容語文を名詞文と見るならば、「カ」語尾形容語文もまた、名詞文に相当するものとしてとらえることができよう。あるいはまた、形容詞語幹の一語文を名詞文と見るならば、それと役割を同じくする「カ」語尾形容語文に体言性を認めることができるのではなかろう

か。以上の点からも、「カ」語尾の本性が体言性を色濃く帯びたものであることを強く感じる。

ところで、九州方言上の形容詞の「サ」語尾と「カ」語尾とについては、瀬戸口俊治氏のご論稿、「薩隅地方方言の方言地理学的研究―〈い〉語尾〈か〉語尾〈さ〉語尾形容詞の分布とその解釈―」（『比治山女子短期大学紀要創刊号』昭和42年3月）がある。氏は「この二つの分布関係については、〈さ〉語尾形が古く、〈か〉語尾形は新しいとみたい。」とされている。九州西部方言上の「カ」語尾形容語存立の基盤には、「サ」語尾形容詞の存立があるものと考えられる。「カ」語尾の成立事情、その本性を考究するためには、「サ」語尾形容詞の存立状況をもたどる必要があろう。

調査期間

佐賀県鹿島市　昭和55年3月～昭和61年8月

福岡県福岡市　昭和61年3月～昭和61年8月

福岡県北九州市若松区　昭和60年8月～昭和61年8月

参考文献

『日本語方言文法の研究』（藤原与一　岩波書店　昭和24年12月）

『日本語方言文法の世界』（藤原与一　塙 書 房　昭和44年7月）

なお、福岡市域における「サ詠嘆法」あるいは「カ」語尾形容語による心情訴え文の状況については、岡野信子先生のご示唆によるところが大きい。記して感謝申しあげる。